

少年の石

久保 喬 著 桜井 誠 絵



少年の石

久保 喬



913.6 久 保 喬

少年の石

新日本出版社 1972

238P 21.5cm (新日本創作少年少女文学13)

久 保 喬
く ぼ たかし

本名・隆一郎。1906年、宇和島市生まれ。松山商業卒業後数年家業に従事したのち文学志望に転じ、東洋大学東洋文学科中退、児童図書出版社に勤務。その後、童話、少年小説を長く書き続けている。「ビルの山ねこ」で小学館文学賞受賞。現在、日本児童文学者協会会員、日本児童文芸家協会会員。おもな著書に「ネロネロの子ら」(東都書房)「海はいつも新しい」(理論社)「風とハンドルのうた」(新日本出版社)など多数があります。

桜 井 誠
さくら い まこと

1912年、静岡市に生まれる。同舟舎絵画研究所で油絵を学び、その後、児童図書のさし絵画家として活躍。現在、日本美術会会員、日本美術家連盟会員、児童出版美術家連盟会員。

おもな作品に「緑のほのお少年団」(新日本出版社)「長くつ下のビッピ」(岩波書店)「時計は生きていた」(偕成社)など多数。

新日本創作少年少女文学13 少年の石

1972 年 2 月 25 日 第1刷発行

1974 年 7 月 5 日 第4刷

著 者 久 保 喬

画 家 桜 井 誠

発行者 松 宮 龍 起

郵便番号102 東京都千代田区富士見2-13-14

発 行 所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電話 (265) 7006(営業), (265) 2075(編集) 振替東京13681

印刷 鎌倉印刷株式会社、製本 古賀製本株式会社

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

*もくじ



はじめに

5

火と土の子ら……………6

わらうハニワ……………28

荒草の兄弟……………54

鬼とひいなと石……………90



空を切る石……………112

金づちといのち……………134

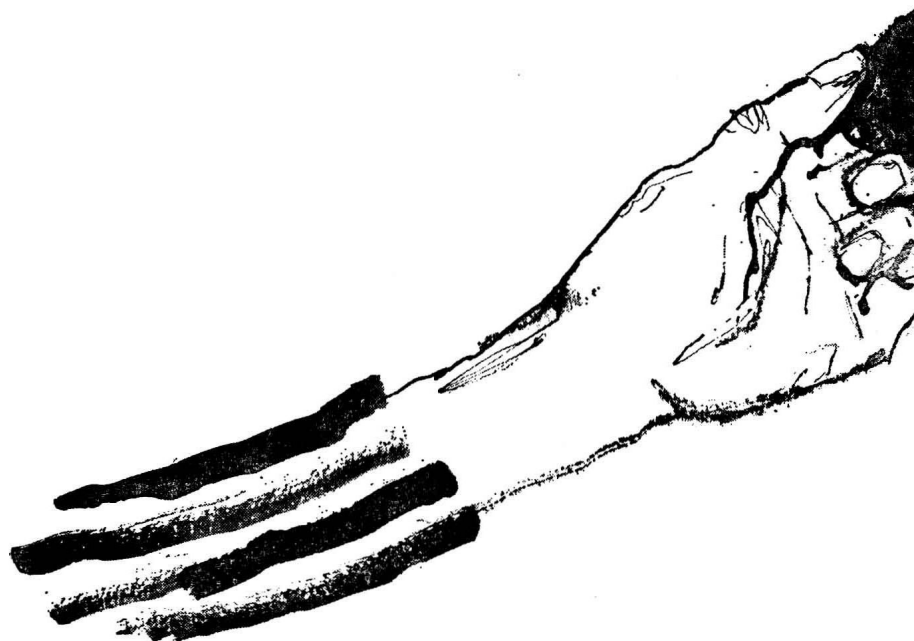
時計の目……………164

街の石ころ……………184

少年の橋……………202

あとがき

236



菱丁・さし絵

桜井

誠

はじめに

ある日、街のビルのそばで、ふと、ぼくがひろった石。黒い小さいカメの子の形の石。だれがおとしていったのか。どんな子どもが持っていたのか。

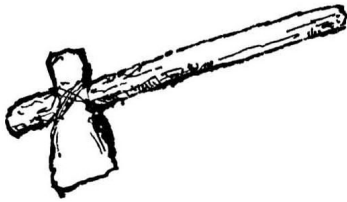
見つめていると、石を持った子どもの手、顔も知らない子どもたちの手、まるい手、黒い手、どろんこの手、しもやけの手、きれいな手、小さい手。さまざまの子の手のむれがかさなって見えてくるような気がした。

*

石はつめたい。だが、石を持つ子の手はあたたかい。

石は長い時間の中を越えてきた。その時の流れの中で、石を持ついろいろな子どもたち。その子たちの命とゆめが、それぞれの時間いっぱいどんなに燃えて生きていたか、この小さい石はよく知っている――。

火と土の子ら



1

ヤオは高い木の枝えだに、ぎゅっとしがみついている。谷を渡わたる北風が、顔をつきさすようにつめたく吹きつけてくる。

「ヤオ、ヤオ、おりろ。」

木の下で母のさけぶ声がする。だが、ヤオはこたえない。

崖がけのはしからつき出ている木の枝に一つだけ残っているクルミの実。そこまでいくと、からだの重みでボキリと折れてしまいそうな細い枝、ま下を見ると、くらくらつとするような深い谷間だ。ヤオはぶると手足がすくむ。でも、のぼらずにはおられない。

ヤオはもう三日ほど、何も腹はらに入れていない。ひもじさにキロキロ目を光らせてうろついていた。

毎日、まだ夜明けの森の霧きりの中へ、石やりや弓矢ゆみやを持ったおとなたちが、ぱたぱたすがたをけしていく。でも、日暮ひぐれの青

い闇やみがおりてくるころ、みんなが、ひげとどろだらけの、顔もからだもがっくり力が抜ぬけたようなところ、かえってくる。

「食えない、きょうも——」

「めめ、ひもじい、めめ——」

草ぶきのそまつな小屋が、森と谷の間にばらばら、七つ、八つならんでいる部落ぶろくの中で、めめ(母)をせめる子の声もする。

ヤオはまだおとなの狩かりの仲間なかまに入れてはもらえない。部落のまわりや近くの森をうろついてさがしても地面には何もない。土を掘ほって、草の根をむしりとなったり、冬ごもりのカエルやヘビなど、見つけるとすぐ食ってしまう。小さい虫一ぴきでも子どもたちは取り合いのけんかになる。

——ずっとまえにも、こんなことが、いや、もっとひどくなったことがあった——

小屋のすみで、何も食べずにひからびたようなすがたで死んでいた年よりや、女親おんなおやにだかれたまま動かなくなったちのみ子——

そんないつかの日のこともヤオの心に残っている。

あれはいやなまっ白なつめたいものが、小屋のまわりも、土も木も森もすっかりつつんでしまったころだった——

また、あのいやなまっ白なものがやってくるかもしれない——

そんな不安もわいてくる。

ふと、出会ったなかまのカトリをつかまえて、

「おい、おまえのうちのつぼには、まだ何かあるだろう。」

と、ヤオはきく。

狩に出た連中がとってくるえもの、肉は、部落中の年よりも女も子どもひとりこらず分けてもらえる。でも、木の実や草などはめいめいが拾ってきたくわえる。

ヤオのうちは父がない。そして、母は足がびっこだ。

カトリのうちは、元気な母が木の実があるころ、トチやクリ、ドングリなどをよそよりもたくさん集めてきているらしい。それをカトリがときどきぬすみ出している。

「一つか、二つでもくれよ。」

ヤオがねだると、カトリは首を横にふつたが、でも、ふと、ヤオの腰のあたりへ目を向けて、

「それを、その石をくれたら食う物をやる。」

「うっ、この石——」

こんどはヤオが返事につまった。

それはヤオのだいな石だ。どの子どももタカラモノを持っている。けものの歯や小さい骨のかけらなどを、木のツルに通して、おとなの首かざりをまねたものや、きれいな色のキジの羽根、リスの

しつぽなど。そんな仲間たちのどの持ち物よりも、自分の石はとくべつ変わった、めずらしい物だとヤオは思っている。

手のひらの中にはいるくらいの石だが、黒くてまるい形が、小さいカメの甲羅こうらにそっくりで、はしのところがちよつとまるくたび出ているのも、カメの子が頭を出しかけているように見える。

ずっと前に、母がどこかで拾ってきてヤオにくれた。

「そら、にぎり石にもなるよ。」

石のはしが刃物はもののように平たくて、手に握にぎって物を切ったり、たたいたりする道具にもなる。ヤオはすっかり気に入って、草のツルで編あんだふくろに入れて腰こしにさげている。

「カメの石、カメ石だ。」

仲間たちにじまんして、手のひらにのせてみせたり、木の実を割わってみせたりすると、だれでもがほしそうな顔をする。その石を、いまカトリにくれといわれて、ヤオは思わず首を横にふった。

でも、カトリと別れると、すぐに、

——しまった——

と、思う。やっぱり、口に入れる物なら、このだいじな石とでもとりかえてしまえばよかった。

カトリをさがして歩きまわると、家の裏手うらでに落ちていたけもの足の骨を拾った。古い骨で、肉らしいにおいも無いのに、むちゅうで歯をあてて、キリキリかみながら、



—— 食いたい —— 何でも食いたい ——

谷のそばまでやってきたとき、ふと、むこうのクルミの木の高い枝に一つだけ残っている実が目にとまった。ツタのツルがからんでいるので、冬の間も落ちないでくっついていっているらしい。

崖^{がけ}から谷の上へのびた細い枝で、だれもそこまで行けなくて残っていたのか。見つめていると、口の中にあまいクルミの味がしてきて、ごくりとつばきがたまってきた。それで、むちゅうで幹^{みき}にとりつき、よじのぼってきたのだった。

細い枝に足をかけると、ぐーっとなつていくのをかまわず、手をのばして、まるい実に指がとどきかけたとき、

ペシリッ——枝が折れて、乗っていたヤオのからだは宙にうき、そのまま、どさーっと、ま下の谷へ落ちていった。

2

シカの頭や、イノシシの頭がケラケラ笑っている。朝の広場で、けものの皮をかぶった子どもたちが、ぐるぐる輪になつてはねている。それは昨夜のおとなたちのおどりのまねだ。

夕方、狩からかえつてきた連中が、思いがけない大シカと子ジカの死体をついでいた。部落は大さわぎになつた。

すぐに広場にみんながあつまり、大きな火が燃えあがり、切りさかれたシカの肉の焼けるにおいが広場じゅうにただよつた。

ぴちやぴちや、肉にかぶりつくどの顔も、どの口もギラギラとまっ赤な火にそまつて見えた。

やがて、オッホーと立ちあがった若者が、手を、腰をふりながら狩の祝いのおどりはじめた。みんなも手を打ち、はやしたてた。

そんなゆうべのよろこびが、けさもまだ広場の中に残っていて、子どもたちをうかれさせているのだった。

ヤオもいっしょにさわいでいた。二、三日まえ、クルミの実をとろうとして、谷へ落ちた。岩の上なら頭は割れて、からだも折れてしまったのが、すこしそれで流れの中へ落ちたのでたすかった。

でも、そんなことはけろつとわすれてしまって、いまでも陽気におどっている。

そこへ、小さな弓と矢を持ったカトリがやってきた。おとなの弓をまねてじぶんで作った新しい弓だ。ヤオは急にほしくなった。

「それ、くれないか。」

「いやだ。」

すると、ヤオはかっとしてきて、

「くれるなら、これやるぞ。」

思わず腰のカメ石をとりだした。

「うん。」

と、カトリはうなずいて、

「じゃあ、よこせ。」

ヤオはむちゅうで、石をわたして、その弓をうけとった。

このまえ食べる物がないうとき、木の実ととりかえることさえためらったヤオなのに、いまはふとしたはずみで手ばなしてしまった。

ヤオはその遊び道具、新しい弓に矢をつがえて、ヒューヒューと、空へとばした。何度目かに、木のツルを力いっぱい引いたとき、ポキリッと、弓の竹が折れてしまった。

「だめだ、これは。」

ヤオはカトリをつかまえて、

「石をかえせ。」

「いやだ、その弓をなおせ。」

ふたりはとくみ合いになった。土にころがり、ひっかき合い、かみつき合い、そして、相手の口の中へ草やどろをおしこんでいく。

まわりで、みんなが、わやわや笑って、はやしたてる。

そのとき、むこうの家からとび出してきた女が、

「ヤオー」

と、かん高くさげんだ。ヤオの母だ。目をキラッと光らせて、組み打ちをしているふたりのそばへいき、カトリの肩かたをひつつかんで、つきとばした。

まわりの子たちが、

——あ、また出てきた——

と、いうようにヤオの母をにらんだ。

ヤオの母はいつもこうして、ヤオのけんかの相手の子を、いきなりぶったり、つき倒^{たお}したりしてしま^まう。

カトリの泣^なき声を聞いて、となりの家から、すぐにカトリの母も出てきた。ヤオの母とわめき合^あい、つかみ合^あい、おたがいのかみの毛をツル草のように引っぱり合^あいながらさわぎたてた。そこへ、年よりたちがきて、やっと、ふたりを引き分けた。

——めめは、おれのことだと、いつもまるでまっ赤^かな火のようになってしま^まう——
と、ヤオは思^{おも}う。

ヤオがまだ小さいとき、どうにかひとり歩きができるぐらいになったころだった。

ある日、母につれられて、森のはずれで、ドングリを拾^{ひろ}っていると、ふいに、むこうの笹^{ささ}のしげみがざわざわゆれて、大きな黒いものが飛び出してきた。こんな所にいつもはくこともない大グマだった。

おどろいたヤオが、わっと、泣^なき声をたてたが、それよりも早く、すこしはなれた所にいた母が、何か大声でさけびながら、ヤオとクマの間へとびこんできた。

その高い声に、クマはめんくらったか、ちようど腹^{はら}もすいていなかったのか、そのままむこうへ逃^にげ